

2015年1月13日

請求者 ウダーラ・イローシニ・ディ・シルヴァ  
論文題目 スリランカ人大学生の日本語学習動機——第二言語自己システムの観点から

論文審査委員 イ ヨンスク  
糟谷 啓介  
庵 功雄

## 1. 本論文の内容と構成

言語学習理論において、学習の成否には、学習者の動機付けが重要であることが従来から指摘されており、さまざまな方法論の枠組みが開発されている。本論文は、言語学習理論の分野をリードする理論家のひとりであるゾルタン・ドルニエイ (Zoltán Dörnyei) の開発した「第二言語自己システム」の概念に基づいて、スリランカにおける日本語学習者の学習動機を調査分析したものである。論文の構成は以下の通りである。

### 図表一覧

#### 第1章 序論

- 1.1 研究の背景と目的
- 1.2 スリランカ人大学生の日本語学習者
- 1.3 研究の意義・位置づけ
- 1.4 研究課題及び概念的枠組み
- 1.5 論文の概要

#### 第2章 先行研究

- 2.1 第二言語習得における動機づけ研究
- 2.2 第二言語・外国語としての日本語習得における動機づけ研究
- 2.3 スリランカにおける外国語としての日本語習得における動機づけ研究

#### 第3章 研究方法及び分析方法

- 3.1 研究方法
- 3.2 分析方法

#### 第4章 学習経験・社会的要因が日本語学習目標に与える影響

- 4.1 はじめに
- 4.2 用語の定義
- 4.3 先行研究
- 4.4 仮説の導出
- 4.5 研究方法
- 4.6 分析結果
- 4.7 終わりに

#### 第5章 学習経験・社会的要因が日本語学習者の持つ態度に与える影響

- 5.1 はじめに
- 5.2 用語の定義
- 5.3 先行研究
- 5.4 仮説の導出
- 5.5 研究方法
- 5.6 分析結果
- 5.7 考察
- 5.8 終わりに

## 第6章 日本語学習目標・態度が第二言語自己に与える影響

- 6.1 はじめに
- 6.2 用語の定義
- 6.3 先行研究
- 6.4 仮説の導出
- 6.5 研究方法
- 6.6 分析結果
- 6.7 考察
- 6.8 終わりに

## 第7章 第二言語自己が動機づけられた学習行動・学習への努力及び学習成果に与える影響

- 7.1 はじめに
- 7.2 用語の定義
- 7.3 先行研究
- 7.4 仮説の導出
- 7.5 研究方法
- 7.6 分析結果
- 7.7 考察
- 7.8 終わりに

## 第8章 結論

- 8.1 結論
- 8.2 今後の課題

## 参考文献

資料 アンケート調査の質問項目

## 2. 本論文の概要

第1章では、これまでの第二言語学習に関する研究の背景と目的、本論文の研究課題と理論的枠組み、そして論文全体の概要が提示される。論文の目的は「第二言語自己システム」の理論に基づいてスリランカにおける大学生の日本語学習者の動機づけを考察することであり、具体的なリサーチ・クエスチョンが提示され、それぞれの問いが第3章以降の各章の内容となる。

第2章では、論文に関係する先行研究の成果がまとめられる。著者はドルニエイの把握に基づいて、第二言語習得における動機づけ研究の展開を整理する。社会心理学的アプローチの時代、認知・状況的アプローチの時代、プロセス重視の時代を経て、2000年代からは社会・動態的アプローチの時代へと移行し、そのなかで「第二言語動機づけ自己システム」の理論が発展してきた

という。それによれば、第二言語学習の達成において重要なのは、学習者が第二言語を使用する将来の自己イメージをどのように想像するかであり、しかもこの自己イメージは学習過程が進むにつれて変容していくものとされる。この観点から、「第二言語自己」を「第二言語理想自己」「第二言語義務自己」「第二言語学習経験」の三つの要素からなるものとしてとらえ、学習動機のあり方をダイナミックにとらえようとするのが、「第二言語自己システム論」である。筆者はこの「第二言語自己システム論」の優れた点を十分に認めながら、それが主に適用されてきたのが英語学習についてであること、そうした研究成果はスリランカという社会にそのまま当てはまるわけではないこと、第二言語自己システム論の観点から日本語学習者の動機づけを分析した研究はまだ少ないことを指摘し、本論文がそうした研究の欠落を埋めるものであることと論じる。

第3章では、本論文で用いたデータを入手するための調査方法とそれらの分析方法が示される。本研究は、2014年10月から11月にかけて、スリランカで日本語を主専攻として設置しているケラニヤ大学とサバルガムワ大学の1年生から3年生の学生を対象として、質問紙調査によるアンケート調査を実施した結果に基づいている。アンケートの質問項目は本論文の末尾に資料として付されている。分析方法としては、統計的データを処理する際に用いられる重回帰分析を用いることが示される。

第4章では、学習者の学習経験と周囲の社会的要因が日本語学習目標に与える影響について論じられる。調査を通して、学習目標と設定ないし達成において、教師による情意的支援と友人による手段的支援、および家族の影響が重要であることが示された。この結果の背景には、スリランカでは教師が学生に対して絶対的な権威としてふるまうことが期待されていること、また、家族が学生の学習達成に関心をもつことなどのスリランカに特有の事情がある。著者はこうした点を考慮して、スリランカにおける日本語教育では、教師が学習者の成果をモニタリングしフィードバックを与え、目標の設定や達成において常にモデリング的な役割を果たすことが望ましい、などの提言を行っている。

第5章では、学習者の学習経験と周囲の社会的要因が学習者の態度に与える影響について論じられる。調査の結果、日本語学習に対する態度や日本語への興味関心の向上に対して、教師及び友人による手段的支援が影響を与えることは、第4章の学習達成と同じであるが、第二言語コミュニティに対する態度などの文化的側面については、教師による情意的支援がプラスの影響を与えたのに対して、友人からの情意的支援がマイナスの影響を与えたことが示された。ここには、スリランカにおける「教師依存」の傾向や日本語関連情報の少なさなどの事情があると考えられる。したがって、日本語教師は教師のモニタリングのもとで、日本の文化や社会に関する正確な情報を学生に与える必要性が浮き彫りにされた。

第6章では、日本語学習の目標や態度が第二言語自己に与える影響が論じられる。本論文の特徴は、独立変数（学習目標と態度）が従属変数（第二言語自己）に与える主効果（direct effect）に加えて、学習者の学習経験を調整変数として採用し、その調整効果（moderating effect）の検証を試みたことである。調査の結果、道具的学習目標が第二言語理想自己の実現に関わることが明らかになった。従来の研究では、第二言語コミュニティへの文化的関心を表わす統合的動機づけの方が、外発的な道具的動機づけよりも重要であるとみなされてきたが、スリランカにおいては、外的に調整された道具的目標が動機づけに肯定的な影響を与えることが示された。その一方、日本語学習経験が増加するにつれて、第二言語コミュニティに対する態度と第二言語理想自己との関係がマイナスになった。これは学習経験の増加とともに、学生たちの想像において第二言語コミュニティから遠ざかる傾向があることを意味する。このことは、スリランカが身の周りで日

本語が使用されていない外国語教育環境にあることと関係している。

第7章では、第二言語自己が学習行動及び学習成果に与える影響について論じられる。調査の結果、第二言語理想自己と嫌悪自己が直接的ないし間接的に学習成果に影響を与える一方で、第二言語義務自己の影響は間接的でしかないことが示された。ここにはスリランカ社会において教育制度が競争的であり、達成者を奨励する傾向があることが関わっており、そうした環境においては、義務自己以上に嫌悪自己が理想自己に関係すると著者は論じる。このこと自体はいくつかの先行研究において指摘されていることであるが、著者の分析によって、スリランカでの日本語教育に第二言語自己システムという観点を導入することの有効性が示されたといえる。

第8章では、これまでの各章の結論をもとに論文全体の結論がまとめられるとともに、その結論をふまえた教育的提言がなされる。それによれば、スリランカにおける日本語教育においては、本論文で示されたスリランカ特有の第二言語自己のあり方を考慮に入れた上で、教育計画が作成され実施されるべきであるとされる。とくに、スリランカのような外国語環境においては、学習者の動機づけの背景にある第二言語自己の有効な活用の仕方について、教師が学習者を率先して指導するリーダー的な役割を果たす必要があるとされる。

### 3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の点にある。

第一に、第二言語自己システム論をスリランカの日本語教育に応用したことで、スリランカの日本語教育における学生の動機づけの特徴が浮き彫りになったことが挙げられる。著者は、スリランカの大学生に対する質問紙調査から量的データを収集し、それに基づいて適切な分析を進め、明解な結論に至った。理論に基づく仮説を立てたうえで、データによって仮説を検証するという分析方法を一貫させており、その客観的で精密な議論の進め方は著者の結論の説得性を高めている。また、スリランカの教育において「教師主導」の傾向が強いことがこれまでも指摘されていたが、日本語教育という実際の現場で、そうした傾向がどのような形となって現れるかを確認したことも、本論文の大きな貢献である。このことは実践的な提言の有効性を示すとともに、第二言語自己システムの理論の射程をさらに広げることに貢献した。

第二に、第二言語自己システム論に著者なりの改定を加えて、新たな試みに取り組んだことが挙げられる。ひとつは、これまでの第二言語自己システム論においては、理想自己と義務自己が重視されてきたが、本論文では第二言語自己を成り立たせる柱として、嫌悪自己（こうなりたくない将来の自己イメージ）を重要な要因として取り上げた。また、第二言語自己を構成するさまざまな要因の間の関係を分析するために、学習経験による調整効果という時間的要因を重視した点も本論文の独自の貢献である。こうした改定によって、スリランカにおける日本語教育という独自の文脈に即した第二言語自己のあり方を考察するとともに、学習経験による動機づけの変容というダイナミックな過程を明らかにすることができた。

第三に、適切な理論的把握と方法論に基づき、データ収集とその分析を通して、具体的な実践的提言を行うことができた点である。著者はスリランカの大学で日本語教育に携わった経験を有しているだけに、著者の提言には、現場の事情に精通する者の強みが発揮されている。本論文で示された提言を著者が具体的に教育の場で生かすことが期待される。

しかし本論文には、以下のような問題点が存在する。

第一に、これは著者自身が指摘していることであるが、本論文の基礎となる資料は、質問紙調査にもとづく量的データである。たしかに量的調査は数値化されたデータにもとづく客観性を得

ることはできるが、本論文で示された結論が、学習者個人の経験のなかでどのように処理され、どのような意味をもつかを確認するためには、量的調査だけでなく、インタビューなどの方法を用いた質的調査を行う必要があったのではないだろうか。学習の動機づけという心的傾向の具体的なあり方を明らかにするには、質的調査の方が適切な場面もありうると思われる。ただし、質的調査には多大の時間が要求されるため、本論文の枠組みのなかでそれを行うことが困難であったことは十分に理解できる。この点は、今後の研究の発展に期待したい。

第二に、本論文は第二言語自己システム論の見事な適用として高く評価できるが、第二言語自己システム論に対する理論的検討ないし反省が十分に行われているとはいえない。「第二言語自己」という概念は、社会から独立した自己が成立しうるとみなされている環境と社会からの規制が個人に強くかかる環境では、かなり異なる内容をもつように思われる。もちろん著者はそのことに自覚的であり、だからこそ「嫌悪自己」や道具的動機づけの要因を重視したのであるが、さらに社会的文脈に応じた「自己システム」概念の当否にまで溯って考察してもよかったと思われる。この点も研究の課題となるにちがいない。

しかし、以上の弱点は著者も十分に理解しており、本論文の達成した成果を損なうものではない。本論文は、第二言語自己システム論という近年発展した理論に基づいて、スリランカの日本語教育における学生の動機づけを分析した研究として、優れた学術的価値を有している。ここで示された成果は、日本語教育だけでなく、他の第二言語教育ないし外国語教育においても参照されるべき水準にある。著者が本論文の成果をスリランカの日本語教育に生かすとともに、第二言語学習理論に関する研究をさらに発展させることが大いに期待される。

#### 4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

## 最終試験結果の要旨

2016年1月13日

論文審査委員

イ ヨンスク

糟谷 啓介

庵 功雄

2015年12月11日、学位請求論文提出者 ウダーラ・イローシニ・ディ・シルヴァ 氏の論文「スリランカ人大学生の日本語学習動機——第二言語自己システムの観点から」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、ウダーラ・イローシニ・ディ・シルヴァ 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、ウダーラ・イローシニ・ディ・シルヴァ 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。